

2020年度博士論文（要旨）

訪問リハビリテーションサービスを提供する理学療法士・作業療法士の
介護支援専門員との連携に関する研究

老年学研究科 老年学専攻
丹野 克子

博士学位請求論文の要旨

日本では、地域包括ケアシステムの構築が求められ、生活機能を見据えた多職種協働によるリハビリテーション（以下、リハ）の実施が必要とされている。ここで求められる「リハビリテーションの実施」は多職種協働であり、多職種協働においては参画する専門職間の連携（以下、職種間連携）が必要不可欠である。

本論文では、介護保険制度の下で実施される職種間連携の中でも、サービス間の連絡調整を業務とするケアマネジャーと、リハビリテーションサービスを要介護者の自宅を訪問して提供する訪問リハビリテーション（訪問リハ）を担う理学療法士・作業療法士（訪問リハ職）との間の連携を対象に実施した研究を記した。

第1章では、研究の背景、目的・意義と基本的視点、および本研究における用語の説明を記述した。

研究の背景として、職種間連携に関する実践的研究について、訪問リハ職を対象としたものは、国内外を通じて少なかった。介護保険制度下では、サービスが必要な対象者に届き、適切に利用されるためにケアマネジャーの役割は重要であり、サービス提供者は必ずケアマネジャーとの連携を持つ。よって本研究では、①訪問リハ職とケアマネジャーの両者を対象とした調査に基づき、2職種間の連携の構成要素、展開過程、機能を明らかにする。②訪問リハサービス内容に関するケアマネジャーの認識とそれに関連する要因を明らかにすることを目的とした。

本研究における用語の説明では、本研究の目的①のために、連携の概念、構成要素、展開過程、機能、効果と限界という用語を操作的に定義し、記述した。

第2章では、研究1として、「訪問リハ職とケアマネジャーの相手職種との連携の様態」を明らかにした。それぞれの職種から捉えた、相手職との連携について、グループインタビューのデータを分析した結果を、個別インタビューで補完する形で把握した。第1節で訪問リハ職の視点によるケアマネジャーとの連携の様態、第2節でケアマネジャーの視点による訪問リハ職との連携の様態を記述した。

訪問リハ職は、ケアマネジャーを含む他職種や家族等の関係者との間で、目標設定のジレンマ、本来立てたい個別援助計画とのギャップ、職種・職歴等に影響されて感じる圧力、さらに人的・時間的制約により望む連携機会を確保しにくい物理的な困難を抱えていたことが明らかになった。ただし、そのような困難を抱えながらも、依頼を受ける時から多様な人々との情報交換レベルでの連携を試み、業務遂行においては大きな問題になることなくサービス提供を行っており、このような連携の試みの中で、ケアマネジャーとの間に、双方向に配慮した働きかけが行われ、このことが訪問リハ職の不満・困難感の解消に貢献していることが示された。

ケアマネジャーは、利用者を含むチーム全体の思いや動きを把握しながら、個々のサービス専門職が最大限に有効活用されるよう、効果的・効率的なチームアプローチを促進しようと行動していた。そして、ケアマネジメント上の不安、意欲、判断、期待等の思いが、このような行動を促しているものと考えられた。訪問リハ職に対しても同様の態度をとっていたが、ケアマネジャーにより、訪問リハ職に対する理解や期待に違いがあり、違いはケアマネジャーの環境因子や個人因子によるものと考えられた。さらに、ケアプランへのリハサービス設定は、利用者の生活ニーズに基づきつつも、サービス利用目標や内容は限定的で、形式化しやすいことが明らかになった。

第3章では、研究2として、「訪問リハ職に関するケアマネジャーの認識」を明らかにした。

訪問リハ職は、心身機能・身体構造、活動、参加といった生活機能、および環境因子に同時に視点をおいて、それぞれへの介入を行っていた。そのような介入に対するケアマネジャーの認識にはばらつきがあり、介入の有無を正しく認識しやすい内容と、認識しにくい内容があった。両者の間では少なくとも毎月の定期報告が交わされ、時には臨時の情報のやり取りが存在しているが、情報の活用面での課題が捉えられた。

さらに、訪問リハ職が提供している内容に関するケアマネジャーの認識度の要因を探るため、認識度の高い群と低い群の2群に分けて比較した。結果は、訪問リハ職の年代が低いこと、ケアマネジャーの事業所に訪問リハ事業所が併設されていること、訪問リハサービス提供時間中にケアマネジャーが訪問して利用者宅で両者が顔を合わせる機会があること、訪問リハ職がケアマネジャーの事業所に訪れて面談する機会があることが、認識度の高い群に多かった。このことから、面談等の情報授受方法が、サービス提供内容の理解に影響する可能性が捉えられた。

第4章は、最終章として、第2章・第3章で得られた知見をまとめ、目的に沿って本論文全体の総合考察を記述した。

最終的に、以下を本研究から得られた知見としてまとめた。

1. 両者ともに義務的業務を超えた連携を行っており、その効果を体感することで、相互に期待している関係が築かれていた。

2. 両者の連携に影響する要因には、①利用者の経過、②訪問リハ職の心理的・時間的負担、③ケアマネジャーにおける訪問リハ職との接触や訪問リハサービスの利用経験、④両者の専門志向と相互の関心度、⑤両者の指示書を出す医師等との関係、⑥所属事業所の関係があった。

3. 両者とも連携の効果を認識し、効果を期待して連携が促進され、より効率性を求める工夫を双方が行うことで、連携方法の改善が図られていた。それによって、情報交換のレベルの連携から、相互協力を遂行するレベルの連携へと質的な変化が生じていた。

4. 連携に対する態度については、連絡調整を主な役割とするケアマネジャーとは異なり、訪問リハ職においては、その必要性は認めつつも主な仕事に含まれないことから時間的な制約もあり、期待する連携が取れていないという見方をしていた。

5. 利用者に対する目標・目的の共有の不十分さがあり、訪問リハ職にはこの意識が強く、ケアマネジャーには弱い傾向があった。しかし、この齟齬が両者の協働に支障を来たしているとはいえなかった。

6. 利用者の自立支援の志向性を、訪問リハ職が強くもつのに比べて、ケアマネジャーの場合は安全志向・安定志向が強いため、目標共有の困難さにつながる葛藤が存在していた。さらに、この葛藤は訪問リハ職には強く自覚されている反面、ケアマネジャーには意識されにくいものだった。